

Computer Report

Vol. 55 No. 11 11月号 (通巻 734号)

はじめの言葉

■あろうことか、多くの住民が住んでいるマンション建造物が傾いた。その原因は基礎工事中の基礎、地盤強化工事の杭打ち作業の手抜きだったと判明。かつての耐震構造計算の偽装と同等の反社会的行為があったことが明るみに出たのだ。事件が取り沙汰された当初は、当該マンションの販売企業（デベロッパー）の責任を問う声が上がった。が、それはいつしか、基礎工事の下請け企業の責任を追及する大騒動となっている。

■正確には、下請け企業というよりも、当該物件の杭打ち作業を担当した責任者に焦点が当てられている。全国規模で請け負った杭打ち作業全部を徹底調査するというので、当たり前のことではあるが、企業として随分と真摯な姿勢だと思ったが、何のことはない、限りなく個人的事件に仕立て上げられている。特定担当者の関与した工事現場を洗い出ただけで、あたかも、他の担当者が関与した現場作業は問題なしとしているかのようだ。

■とにもかくにも、全件検査の実態把握のやり方に、新たな疑念が湧いてきた。一般論としては、確かに、旭化成建材が本件における下請け企業なのだが、実際には更なる下請け業者の存在があつての作業であつたように思える。その意味でも、旭化成建材の一担当者レベルの問題ではないと思う。ちなみに、下請けの下請けの、またその下請け業者の存在は、改めて言うまでもなく、情報処理の世界でも常識化している話である。

■地震対策の一環である地盤強化のための杭打ち作業は、すでに専門領域なのだろう。情報処理の世界のように駆け出しの業界でない建設業界には、紀元前のピラミッド建設時代からの長きにわたる様々な専門／特殊技術に裏打ちされた専門業者の存在がある。まさに、ピラミッド式に、それら業者の専門技能が組み合わされて建造物が造られる仕組みになっている。ひとつでも不正不確実な要素があると建造物全体が破綻する。

■それだけに、建設業界は先駆ける形で、ISO9000 だ、ISO14000 だのという、業界全体にわたる作業品質管理だの、社会的責任だのと取り組んできた(はずだ)。それを考えると、これまでの掛け声は一体何だったろうかと思う。会見に出たトップが頭を下げたり、涙を流したところで意味がない。ましてや担当者の個人プレーだとして決着させて治まる問題でもない。新たな大きなボタンのかけ損ないが始まっているようにも思える。

■社是である「技術の東芝」を捨て去り、「不正会計の東芝」へと墜落してしまった東芝トップの例も含めて、日本の大企業の品質保証というより、日本企業の経営トップの品質が地に落ちたと言うしかない。トップがこれでは、社員の品質も疑われて然るべきである。品質を誇るべきところを、逆に反社会的行為を繰り返している様は、分裂中の暴力団組織と何ら変わらない。交際を断るどころか、断られる側になっている。

■求められる企業像(社是／理念)があつて、それを達成出来るような人材像を描き、その育成をする。それが、企業は人なりと言われてきた要諦である。いつしか、自社に必要な人材がいなくなり、まともな仕事をするためには、ほとんど丸投げの形で外部に依存するしかない。こんな企業に、社会的品質保証も、企業環境としての社会的責任論も論じる資格はない。ISO9000 認証も US0800 の証明でしかなかったということか。(藤見)